

# クラスタリング情報つき半正定値計画問題に対する双対解法

東京工業大学 \*ナムチャイシリ チャールズ NAMCH AISIRI Charles  
05001310 東京工業大学 劉田香 LIU Tianxiang  
01704970 東京工業大学 山下真 YAMASHITA Makoto

## 1. はじめに

本研究では、以下の対数行列式つき半正定値計画問題を対象とする。

$$\begin{aligned} \min_{\mathbf{X} \in \mathbb{S}^n} f(\mathbf{X}) &:= \mathbf{C} \bullet \mathbf{X} - \mu \log \det \mathbf{X} + \rho \sum_{i < j} |X_{ij}| \\ &\quad + \lambda \sum_{(i,j) < (s,t)} |X_{ij} - X_{st}| \quad (\mathcal{P}) \\ \text{s.t. } \mathcal{A}(\mathbf{X}) &= \mathbf{b}, \mathbf{X} \succ \mathbf{O}. \end{aligned}$$

ここで、 $\mathbb{S}^n$  はすべての  $n$  次実対称行列の集合とし、 $\mathbf{X} \succ \mathbf{O}$  は行列  $\mathbf{X}$  が正定値であることとする。また、関数  $\mathcal{A}: \mathbb{S}^n \rightarrow \mathbb{R}^m$  は  $\mathcal{A}(\mathbf{X}) = (\mathbf{A}_1 \bullet \mathbf{X}, \mathbf{A}_2 \bullet \mathbf{X}, \dots, \mathbf{A}_m \bullet \mathbf{X})^T$  と定義し、 $\mathbf{A}_1, \mathbf{A}_2, \dots, \mathbf{A}_m \in \mathbb{S}^n$  と  $\mathbf{b} \in \mathbb{R}^m$  は与えられているとする。  $1 \leq i < j \leq n$  と  $1 \leq s < t \leq n$  に対して、 $(i, j) < (s, t) \Leftrightarrow (i < j) \vee (i = j \wedge s < t)$  と定義する。

問題  $(\mathcal{P})$  は、以下の問題の拡張として捉えられる。

$$\begin{aligned} \min_{\mathbf{X} \in \mathbb{S}^n} \mathbf{C} \bullet \mathbf{X} - \mu \log \det \mathbf{X} + \rho \sum_{i < j} |X_{ij}| \\ \text{s.t. } \mathcal{A}(\mathbf{X}) = \mathbf{b}, \mathbf{X} \succ \mathbf{O}. \end{aligned} \quad (1)$$

問題 (1) は様々な分野に応用を持ち、統計のグラフィカルモデルとも関係している。また、問題 (1) の解法もいくつか提案されており、特に Nakagaki et al. [1] は Dual Spectral Projected Gradient (DSPG) 手法を提案した。この方法は (1) の双対問題に適用され、数値実験により効率的な求解可能であることが示されている。

Lin et al. [2] では問題  $(\mathcal{P})$  を議論している。目的関数の第 4 項はクラスタリングの情報を取り込むために導入されているが、 $\lambda \sum_{(i,j) < (s,t)} |X_{ij} - X_{st}|$  の部分を直接計算するには  $\mathcal{O}(n^4)$  回の計算が必要である。[2] では symmetric Gauss-Seidel based alternating direction method of the multipliers (sGS-ADMM) と proximal augmented Lagrangian method (pALM) を使用した 2 段階アルゴリズムが提案されている。

本研究では、問題  $(\mathcal{P})$  の双対問題に対して、DSPG アルゴリズム [1] を拡張して新たなアルゴリズムを提案する。さらに、生成される点列の目的関数値が問題  $(\mathcal{P})$  の最適値に収束することを証明する。また、提案アルゴリズムでは各反復での計算量が  $\mathcal{O}(n^4)$  から  $\mathcal{O}(n^2 \log n)$  まで削減可能であり、実用的であることを示す。

## 2. 提案アルゴリズムの概要

$(\mathcal{P})$  の双対問題は、目的関数の定数項を除いて以下の  $(\mathcal{D})$  と同値である：

$$\begin{aligned} \max_{\mathbf{y} \in \mathbb{R}^m, \mathbf{W} \in \mathbb{S}^n, \mathbf{S} \in \mathbb{S}^n} g(\mathbf{y}, \mathbf{W}, \mathbf{S}) &:= \mathbf{b}^T \mathbf{y} + \mu \log \det \left( \mathbf{C} - \mathbf{A}^*(\mathbf{y}) + \frac{\mathbf{W}}{2} + \frac{\mathbf{S}}{2} \right) \\ \text{s.t. } |\mathbf{W}| \leq \rho, \mathbf{S} \in \mathcal{S}, \mathbf{C} - \mathbf{A}^*(\mathbf{y}) + \frac{\mathbf{W}}{2} + \frac{\mathbf{S}}{2} &\succ \mathbf{O}. \quad (\mathcal{D}) \end{aligned}$$

集合  $\mathcal{S}$  は線形写像

$$[Q^\dagger(\mathbf{Z})]_{ij} = \begin{cases} \sum_{(s,t) > (i,j)} Z_{ij,st} - \sum_{(s,t) < (i,j)} Z_{st,ij} & \text{if } i < j \\ [Q^\dagger(\mathbf{Z})]_{ji} & \text{if } i > j \\ 0 & \text{if } i = j \end{cases}$$

と  $\mathcal{Z} := \{ \mathbf{Z} \in \mathbb{S}^{\frac{n(n-1)}{2}} \mid |Z_{ij,st}| \leq \lambda \}$  を用いて、

$$\mathcal{S} = \left\{ \mathbf{S} \in \mathbb{S}^n \mid \mathbf{S} = Q^\dagger(\mathbf{Z}), \text{ where } \mathbf{Z} \in \mathcal{Z} \right\}$$

として定義される。ここで、 $\mathbf{S}$  が  $\mathcal{S}$  の要素であるかどうかの判定は  $\mathcal{O}(n^4)$  の計算量が必要であることに注意したい。そのため、 $\mathcal{S}$  の判定の代わりに、 $\mathcal{S}$  から  $\mathcal{S}$  への射影を計算する。 $(\mathbf{y}, \mathbf{W}, \mathbf{S})$  から  $\mathcal{M} = \mathbb{R}^m \times \mathbb{W} \times \mathcal{S}$  への射影を以下のように定義する：

$$P_{\mathcal{M}}(\mathbf{y}, \mathbf{W}, \mathbf{S}) := (\mathbf{y}, [\mathbf{W}]_{\leq \rho}, [\mathbf{S}]_{\mathcal{S}}).$$

$[[\mathbf{W}]_{\leq \rho}]_{ij} = \max\{-\rho, \min\{\rho, W_{ij}\}\}$  とし、 $[\mathbf{S}]_{\mathcal{S}}$  は  $\mathcal{S}$  から  $\mathcal{S}$  への射影とし、以下のように計算する：

$$[\mathbf{S}]_{\mathcal{S}} := \arg \min_{\mathbf{U} \in \mathcal{S}} \left\{ \sum_{1 \leq a < b \leq n} (U_{ab} - S_{ab})^2 \right\}. \quad (2)$$

$g$  の勾配ベクトルは以下のように計算できる：

$$\begin{aligned}\nabla g(\mathbf{y}, \mathbf{W}, \mathbf{S}) &:= (\nabla_{\mathbf{y}} g(\mathbf{y}, \mathbf{W}, \mathbf{S}), \nabla_{\mathbf{W}} g(\mathbf{y}, \mathbf{W}, \mathbf{S}), \nabla_{\mathbf{S}} g(\mathbf{y}, \mathbf{W}, \mathbf{S})) \\ &= \left( b - \mathcal{A}(\mathbf{X}(\mathbf{y}, \mathbf{W}, \mathbf{S})), \frac{1}{2} \mathbf{X}(\mathbf{y}, \mathbf{W}, \mathbf{S}), \frac{1}{2} \mathbf{X}(\mathbf{y}, \mathbf{W}, \mathbf{S}) \right).\end{aligned}$$

ここで、

$$\mathbf{X}(\mathbf{y}, \mathbf{W}, \mathbf{S}) := \mu \left( \mathbf{C} + \frac{\mathbf{W}}{2} + \frac{\mathbf{S}}{2} - \mathcal{A}^*(\mathbf{y}) \right)^{-1}$$

である。また、 $\mathbf{X}^k = \mathbf{X}(\mathbf{y}^k, \mathbf{W}^k, \mathbf{S}^k)$  とし、 $\mathcal{F}$  は  $(D)$  の実行可能領域とする。

提案アルゴリズムの枠組みは以下のように与えられる。

---

### アルゴリズム 1 : Novel DSPG

- **Step 0** 初期点  $(\mathbf{y}^0, \mathbf{W}^0, \mathbf{S}^0) \in \mathcal{F}$  を取る。また、反復回数を  $k = 0$  とする。
- **Step 1** 終了条件を満たすなら、 $(\mathbf{y}^k, \mathbf{W}^k, \mathbf{S}^k)$  を最適解として終了する。
- **Step 2** 探索方向を射影により以下のように求める：

$$\begin{aligned}(\Delta \mathbf{y}^k, \Delta \mathbf{W}^k, \Delta \mathbf{S}^k) \\ := P_{\mathcal{M}}((\mathbf{y}^k, \mathbf{W}^k, \mathbf{S}^k) + \nabla g(\mathbf{y}^k, \mathbf{W}^k, \mathbf{S}^k)) \\ - (\mathbf{y}^k, \mathbf{W}^k, \mathbf{S}^k).\end{aligned}$$

- **Step 3**  $\mathbf{X}^k$  のコレスキー分解と直線探索を使い、

$$(\mathbf{y}^k, \mathbf{W}^k, \mathbf{S}^k) + \nu^k (\Delta \mathbf{y}^k, \Delta \mathbf{W}^k, \Delta \mathbf{S}^k) \in \mathcal{F}$$

になり、目的関数  $g$  の値が非単調上昇するようなステップ幅  $\nu^k$  を求める。

- **Step 4**

$$\begin{aligned}(\mathbf{y}^{k+1}, \mathbf{W}^{k+1}, \mathbf{S}^{k+1}) \\ := (\mathbf{y}^k, \mathbf{W}^k, \mathbf{S}^k) + \nu^k (\Delta \mathbf{y}^k, \Delta \mathbf{W}^k, \Delta \mathbf{S}^k)\end{aligned}$$

とし、次へ更新する。

- **Step 5**  $k \leftarrow k + 1$  とし、Step 1 に戻る。
- 

### 3. 収束性解析

提案手法では、以下のように  $(D)$  の最適値を得ることができる。双対定理から双対ギャップが 0 となるため、 $(P)$  の最適値も同時に得られる。

**定理 1.** 双対問題  $(D)$  の最適値を  $g^*$  とする。提案アルゴリズムはある反復  $k$  で  $g(\mathbf{y}^k, \mathbf{W}^k, \mathbf{S}^k) = g^*$  となるか、あるいは

$$\lim_{k \rightarrow \infty} g(\mathbf{y}^k, \mathbf{W}^k, \mathbf{S}^k) = g^*$$

である。

この主定理のために本研究では複数の補題に証明を与えているが、以下の補題などは新しい変数  $\mathbf{S}$  に関係している。

**補題 2.**  $(\mathbf{y}^*, \mathbf{W}^*, \mathbf{S}^*)$  が  $(D)$  の最適解である必要十分条件は、 $(\mathbf{y}^*, \mathbf{W}^*, \mathbf{S}^*)$  は  $(D)$  の実行可能点であり、かつ、ある  $\alpha > 0$  が存在して、

$$P_{\mathcal{M}}((\mathbf{y}^*, \mathbf{W}^*, \mathbf{S}^*) + \alpha \nabla g(\mathbf{y}^*, \mathbf{W}^*, \mathbf{S}^*)) = (\mathbf{y}^*, \mathbf{W}^*, \mathbf{S}^*)$$

を満たすことである。

この補題により、 $(P)$  と  $(D)$  の最適解の関係が求められる。 $(\mathbf{y}^*, \mathbf{W}^*, \mathbf{S}^*)$  が  $(D)$  の最適解であれば、 $\mathbf{X}^* := \mathbf{X}(\mathbf{y}^*, \mathbf{W}^*, \mathbf{S}^*)$  は  $(P)$  の最適解となる。

### 4. 各反復の計算量

提案アルゴリズムの各反復で最も計算時間を要するのは Step 2 で探索方向を計算するところであり、特に (2) での射影計算である。 $\mathbf{S}$  の構成には  $\mathcal{O}(n^4)$  の制約が含まれるため、直接計算をしようとするれば  $\mathcal{O}(n^4)$  以上の計算量が必要である。

本研究では、(2) の双対問題に着目した。双対問題に適切な変換を施すと pool-adjacent-violaters アルゴリズム [3] が適用可能となり、計算量は  $\mathcal{O}(n^2 \log n)$  に抑えられる。主問題にあたる (2) の最適解も、双対問題の最適解から  $\mathcal{O}(n^2)$  の計算で算出できる。よって、提案アルゴリズムの各反復の計算量は  $\mathcal{O}(n^2 \log n)$  であり、[1] の DSPG を直接適用した場合よりも効率的である。

### 参考文献

- [1] Nakagaki, Fukuda, Kim, and Yamashita, “A dual spectral projected gradient method for log-determinant semidefinite problems,” *Comput. Optim. Appl.*, **76** (1), pp. 33–68, 2020.
- [2] Lin, Sun, Toh, and Wang, “Estimation of sparse Gaussian graphical models with hidden clustering structure,” arXiv:2004.08115, 2020.
- [3] Barlow, Bartholomew, Bremner and Brunk, *Statistical inference under order restrictions : the theory and applicatin of isotonic regression*, 1972.